へ 5
2115

利5
門
號 2/15
卷

藤野潔氏遺稿之記
明治四十一年四月廿四日
藤野漸氏寄贈

忘梅集 下

正月

神さびや笠置の滝は凍てて居　本因
年〻に宇治の中は凍て居　其角
神さびや猪のしるさ雲くゆる　巴眠
元ちゝを二人ちるとは老の涙　小春
実ゝ代や万年乗うゝ流つゝ　淳也

大嫁くハ仲人ひとりなし兎に　志梵

大福の鱗りたる我が年かな　出宗

江戸の沙汰ゐる梅や旅おもかし　千那

飲せる志ゆる人ごとしゆれ浜　青木

初若やおちて覚えぬ大名居　赤亮

正月三日蕪又才するをゆるされしに

蓬莱や古木の身の栄えをゆるや　素丈

八株ふや松板わらく菰のや　寸口

腰をさすとさし気生じて鞠を求る　与三

庚申りしていへあたらぬ　連宕

あ菜つゝてしるせ菜の大きさよ　波芸

里人の…若菜摘みかな　仙家

更の川原に摘む…小中川原　宮月

こゝかしこ…小中氷　箕士

元禄三年人日申の上刻なゐふりけるに

地震して雲ハ子ぬりつゝ飄の色　忠

去年より六年に相とゝゝ狐　彼岸
さゝもの子行ゝ所ゝ記ぶさ十文日　書男
左義長大橋をくゝくゝ　橋琴
綱引や男子共集れる形とも　彼岸
つゝ引子供のおゝ〳〵大男　宇月
踏引やとゝ集る中〳〵二三つ　光徹
行ゝ引や行おゝぶ跳る　而將

十四日　此節小

四月　此節小

中ゝ東乃稱ゝ古　書小
云毎年彼岸
元日此童子ゝ子ゝ稱ゝ形　一雅
蓬莱節
中ゝ孫ゝと稚子賦ゝ雛の新　書小
人ゝ小板牛ゝ新ゝひゝかゝ　與之
雛あゝ〳〵遠のゝゝぶ新しな　而將
清ゝゝと汐の干て竹義ぶ　彼岸

曲水宴

御堂殿の宴たてまつりける甲　和之
堂たちかうしと称する所の殿の邪　仁流
西の方に水くまれたりけるの小堂　出家

雜合

打と出て後とくとり合　春之
とり合せ小弼さぶらひ　江山
三人やあらひうちの雜合　出家

ひつさうひつさうとうちとり合　嵐風
菓子鮮　菓粽

三種小盃なりけるの雜の鮮　仁流
ひなれ鮮つくりやの中の菓子肉　松之

粽

松をくてなれ菓子ぶたちまれ　尚家
かんたんのうちふうくれ粽のれ　古楚
皮もくしもあむつうまちまれ　千那

むく内ふうしみちちく粉ふ　國吉
喰ひく條ふおおろ義ちちく紙ふ　板立

苔蘚

赤芳賀ヶ甲ふ四郎五郎ヶ　一詩
中戸ふ与毎紙をとく甲ふ鶏　茅土
五ヶ丹いいく法ふ法ふ甲ふ　七家
ちちく意紙の懸をふうふ　外ふ和
帳ふ北ヶ小ふ和ヶ裏ヶ　路ふ
而得

蒜外くさしふを板京　ちち文

競ふ

ちちくしふる新ふをふる京ふ　宗元
ふふと蒜ちちく紙ひふる　紙ふ
神内や後ふ京ふ馬　板立

市地

小法師の筒井とけふ京ふ　尚ふ
ち食紙先ヶ立ヶ市地ふ　和之

岩三郎人の屋敷に寄ス

一村を つ流れ 江山

七月 廿八朔

筑摩川別流 青不

辻堂の東 何時なれ 昭木

屋根まくし 机 稲 星祭 宇月

名ゐ 名 数多 星祭 尚白

本津川や 切り 橋 星祭 丶

玉祭屋をまもる 何を祭 元義

根芋 ふこ 供 の 佛 れ 掛固

ふけ 供 れ 数 祭 祭 掛

孫の世や 酒 祭 魂 星雪

医 れ 山田矣 れ 波義

玉 大 小 川 中 風雨

まる 医 平 玉祭 義井

華 灯 祭 海 時 海 の 寿 仏尻

笠のり二人とよそほひ踊る孔　脫白
踊りう紙笠をの町のうかむけて　左衛
墓京の風くふ笠の結ふ邪　孟墨
夫しらや拵待の場ふとも所　井下
八郎や聖ふれ後の寄ふく汚　尚白
八りれ年うるとふ朝ふ邪、
八郎り笠とりうのゆる栗山ふ小　一雄

重陽

夫ふ菓子納ふとふ多数節ふ小　尚白

立冬

ふるくなふつふ小ふ衣更　千菓女
衣ふ下帯ふ乙ふん者　一雄
下帯れ弦月ふ夏ふ　尚白

立秋

黄葉ふもふや古寺ふふの秋　淳兒
笠おふかつふふる一ふふ小　南雪

秋風や死なぬいのちの涯のつら　尚白
吹るれ縄ちぶ〳〵や秋の風　杉壌

文本立　茅舎亭

あとなく英揚子なる蓮水　浮兒
ちるさくらやいふ〳〵もてまる枕　洛水
松桂本ちまりけ奥のをきうれ　面白

落葉

三天の山し眞れ木のまゝの邪　芭蕉

落葉ちてかんく山やあれ庵　尚白
山の井やまれ落葉と一まくひ　春興
落葉踏ふ路ふ光ふ冷ふ月　蕉文

永日　茅舎亭

永日やあるる行やよるべれる車　味支
おう秋月や蓮の祝のあかく〳〵しく　尚白
永ふりまたもけふ新く斧の音　浮兒
永さりやあふひ言ふ〳〵大津言　晩翠

長閑　舟縁庵

物のうき夜り打角影に佛これ　草士

長閑や押つけてとく名も禅　尚白

縁庵と舁くわらくや滝の砂ゝ

春眠　并秋夕

眠の雲ねやふらねを那　素匡

秋夕

影菜ねまうれんや秋のうれ　尚介

諸葛武侯生て秋の夕ニ那　素丈

寒　并暑

こ侍にあ不二藤連八足ら見とかこゝ　兵眠

漾湖て川急さも或藤見不八　素完

寒さ数不ゝかくきしぬ瑞の扇　捨山

暑

死うしやにてり兄され気にゝ　浪谷

ほろくと雨の鳥尾吹兄さうれ　一瓢

暑りや常ならぬ一品菓　常子
然くしも初とつ小菓ぶる　尚広

三り畫　茂みり子

喜ぶ人もく寄れやたちられを　去墨
知しれし昨こうつく春れ書　国吾

九り畫

秋やまの月ふうれ一ツ松、

相撲

古参ものこそいふ実お撲　女子菓
小さ子ものぶふたく物や義刀　尚広
参者と新田金坊ふれまるぶ、
写見小出て疫義ふる相撲ふを、
投ふ出ふく知新やふれお撲ぶ　物定

初冬

こ新ふく出ふ春り浦やふ沖ふ月　一祝
食後ふくあ角ふろしかくなるを　芋士

十月や底なき池の底の月　故雲
大根ぬき残したる畑や西の雲　尚志
ふるあめにせきこむ池の蛙哉　青丈

極り

[illegible]　女菊
[illegible]　涼兒
[illegible]　兵眠
[illegible]　仁流

[illegible]　而得
[illegible]　丿雲
年義蕉翁の[illegible]　東雷
[illegible]
[illegible]　捨山

弟衣　付袋

つ[illegible]や妹うつくしの[illegible]紙子　尚志
[illegible]衣[illegible]月[illegible]　青元

弟食喪屋之夜柝の履うれ　尚古

埋火　付炭

俗物を粉炭久しく来たれ　園客

人待てうち和ふあつさうれし　比賦

我見ぬ炭今見えうれたうれし　味文

面白く又炭くあるうれし　而得

炭うれし拝ものとのうれ嬉しし　与佛

うれくやみくれ人ハ炭うれ　麦文

炭壺や茶小一つ此ほ多ら　麦文

以巾　付長袋

与市ぬ中ふあやしや角以巾　許之

懐小長袋ひうむるうれし　尚古

扇

我家ハ冷くうれ考ふ扇うれ　南充

紙ぬ小扇おもふ焼居し　尚白

青扇　付単　手帰人

きさらぎあまるとなるなかの女のる　人流
あるを海氣毎つるふるをすきるれ　尚白
蒙こるを出ぬ為ぬるうるるとを　兵職
ぬるつしり海ぬるるやををくをを　家士
作婦人ををふ机やをををを　尚白
秋作を抱ふしりをや竹夫人　重名

納涼

啓ゝ墨を四ををしすみつ雅　千那

涼しやかく掛ふる墨絵ふ　清親
きをしはを新をちふを人風　心流
時を東をお撰始新涼うれ　一歳
涼しを成人ををを本陰ふ　玄蕃

氷室

五月鯉あつをしを氷室　尚白

雲丁

むしをやを雲をををあるを　丶

[illegible]ニテや[illegible]無不振[illegible]ん　而ハ

夜癖

[illegible]や[illegible]ハ小　玄菌

夜癖や我[illegible]漢の所者月　当日

[illegible]

[illegible]

茶食

八[illegible]人小[illegible]ハ[illegible]　左[illegible]

細代　付葉漫尚梁

[illegible]　素男

日蓬の[illegible]　青不

葉漫や[illegible]泥[illegible]　万香

形代の果[illegible]や[illegible]梁　白貴

[illegible]川　付川[illegible]

[illegible]　淳兄

毎[illegible]ハ義やく[illegible]ハ　南[illegible]

悪くて紀伊の牙ふるひや夜の海　尚白

川狩や色よりもまれる蟹一つ　京元

紙芝

いうの雪と屋ふる時を哀なり　元安

いう所の作法重振小松ひろ刈　而好

傀儡

雨ふりて茅屋松や傀儡師　恒斉

時子

夢枯く時子ふりこの年少南原　之ト

碓

大坂の二人ふなるとし碓うれ　在井

茅屋ふるとも茅ふるこ小　設斉

さびしさや碓うれ後の孫うれ　尚白

涅槃　番涅佛

累穀者よ祈ちんの座ぬ生ふれ死　丶

七一度部一ちるふ佛うれ　素男

涅槃会や来代るまでとゝふ　千那
武士は行ふ事や初しんぜふ　紀加

薩佛

一体り法ゆりもて出るの佛　尚白
ゝの佛ともゝうかゝれたるを小
生まるゝまゝ踏つゝ忍佛小　仁渠

法却

暁のゝけものゝうゝ法衣多し　之月

御長

法長のり小稲の立ゝうあ哭ゝ　而妙

古常薩　付鄙悲薩

菊鄙ゝ立ゝ老ゝうゝ命薩　芭蕉
鎌倉ゝ如ゝ新信あゝ行ゝ　尚白
ゝ源り信あゝうゝ多ゝ世ゝ　千那

依保姫　第三四帖

さゝ姫や弱ゝ法ゝ伝ゝ世内　之月

伊保姫ヶ丘四方や尾長鳥　高砂

立田姫

四方の梢ヶ丘を立田姫　枝葉

琴歌

をしか鳴く深草の里よりあふ事、

家武者や男山の弦掛るまつを　たなび

坂おろし酒のさかもりさよふけぬ　高砂

ふせぶしとなくて吉田山の鹿、

御狩

幸崎のたち枯ヶ原やゆふ狩、

つゆもこぼる事遠なる玉川、

枯くさを狩ぬる帰なる狩　兵庫

る条

ゆ条ヶ丘ふかの人や金剛　高土

神楽

八人陰陽舞楽　神楽うた　宮月

所之蓋之爲之置祀乎 書文

忘梅集 下卷

忘梅集余曾祖木翁君所撰也
君諱尚白字三益号木翁晚又号老
贅子天質清雅餘暇好俳諧短句
嘗學於芭蕉翁而翁撰幸其句
尤巍乃者若干贈燹人曰者亦不少矣盖
君之撰此集未脫稿而逝矣是以
祖及考不敢示他人篋藏以傳

於家焉頃仰慕蕉翁之容聞余
家有此集數來乞觀固辭不可
竟出以示之則感吟不歇曰無以
間然耳請以序于不肖余感其篤此
道且成吾先子之志終以屬容并書
其由
安永六年丁酉二月　江左車謹書